

アメリカで暮らしていたとき、日本文化に興味のある現地の方に、日本語学習のお手伝いをしたことがあった。お仕事で世界を飛び回っておられた方で、しばらく日本にも長期出張をしていたことがあるとのことであったが、私が初めてお会いした時にはもうすっかり退職されて、ゆったりとした心もちで日本語に取り組んで下さった。部屋に季節の花を絶やさず、コーヒーも豆からこだわるといふような方だった。ザラという名の正直でほがらかな女性であった。

ザラは和食料理や合気道などにも力を注いでいたが、日本について特に好んでいたものといえば伝統的な手法を用いた焼き物であった。一度だけ、彼女が日本に足を踏み入れる度に各所を回って少しずつ手に入れた和食器を、赤茶色の木製のテーブルに、一つずつ並べてくれたことがあった。良質の土と焼き釜で、どこまでも簡素に焼き上げられた茶碗などは、そのものの美が追求され込められているのだと、持ち重りがして触ると若干表面の粗いそれらを大事そうに白木の箱にしまい込んだ。

足掛け三年、週に二、三回、ザラの日本語学習につき合わせてもらったのだが、芸術に親しむ心が大きいだけあって、彼女の日本語の受け止め方は情緒豊かであった。文法や会話表現の勉強も熱意をもって取り組んでいたが、彼女が一番得意とした嬉々として行ったのは、読解であった。私が幼いころから慣れ親しんだ昔話や童話を教科書代わりに、二人で読み進めたのだ。

かぐや姫、浦島太郎、桃太郎、鶴の恩返し、蜘蛛の糸、竜の目の涙、泣いた赤鬼、因幡の白兔、注文の多い料理店。ぱっと思いつくだけでもこれくらい出て来る。こう思い返してみると、随分たくさん読んだものである。「鶴の恩返し」では、「めでたしめでたし」で終わる作品ばかりではない日本のお話に歯がゆそうに唇を噛み、「因幡の白兔」では、イソップ童話のように教訓めいたお話もあるのだなと深くうなずき、ザラはこちらが見ている気持ちが良いくらいに日本の読み物を堪能してくれた。

「桃太郎」の「どんぶらこ、どんぶらこ」にあるように、日本のお話には、擬声語、擬態語が細やかに使われている。ザラはそれらが文中に出てくる度に、日本人というのは聞こえてくる音や物の感触などを、このように表現するのかと、実に愉快といった風にノートに書き取っていた。

雨が降る音は、ザアザア、ぽたぽた、パラパラ、しとしと。特に、しとしと、という音の響きはそれだけで詩的だ。小学生のころ、幼稚園時代の担任の先生から、「しとしとしと。雨の降る季節になりました」という言葉から始まる季節のお葉書をももらったことがあった。雨がまるで細い透明な糸のようになって庭先の土の上に降り注いでい

る様子が浮かんでくるようだった。雨だけではない。雲はふわふわ、風はそよそよ、まるで手に受けて感じ取ったかのような表現である。

そんな風にザラにゆったりと説明していたとき、私は改めて、日本語の擬声語、擬態語は文章を彩るのに欠かせないばかりではなく、聞き手、読み手の胸の奥にその音や手触りなどが響く作りになっているのだと感じた。知り尽くしていると思っていた家族の、知らなかった心の一面を知り得たような、そんな不思議な気持ちになった。

そのころ私はアメリカの現地保育園で働いていた。クラスに約二十名いた生徒の中に、一人だけ日本人の男の子がいた。親御さんの仕事の関係でアメリカに来たばかりということであった。最初の二ヶ月程は、慣れない英語表現に戸惑いを見せる事もあったが、園での外遊びを繰り返すうちに、いつの間にか他の子どもたちと打ちとけ、四才児らしい元気な笑顔を見せることが多くなった。ある時、年の近いお友だちとかたまって、跳びはねて遊んでいたときに、その子が口元で小さく、ぴよんぴよんぴよんと言ったことがあった。すかさず、隣にいたお友だちが「今、何て言った？」と目をキョロキョロさせた。

普段は子ども同士の話には割って入らず、そっと見ていることが多い。大人が立ち入るのがもったいないくらいに、子どもたちはお互いから吸収するものだ。その時、アメリカに来てまだ日の浅いその子は、小さく「え？」と言うと、恥ずかしそうに口を閉じてしまった。

「カエルがジャンプ！　ぴよんぴよんぴよん」と英語と日本語を織り交ぜながら両足跳びを始めた私を、子どもたちは「先生、何それ」と言って笑い出した。日本人の男の子も小さな両手をほったにこすりつけながら、吹き出して笑った。何のお遊戯が始まったのかと、私の後ろを二歳の子たちもおしりをふりふり弾んでいた。園庭がカエルの池にでもなったかのように、子どもたちはケラケラ笑いながら、しばらく跳びはねていた。

母国語は温かい。私は日本人なのだ。ぴよんぴよんぴよん。弾む音というのはなんて愉快的な響きなのだろう。何故だかその時、日本語をそのままに、活き活きと受けとめられることが嬉しかった。

そんなこともあってか、擬声語、擬態語をノートに書き出して、味わう様に日本語を学ぶザラの姿勢が非常に好ましかった。礼を言いたい気もちにさえなった。

前にあなたは日本の焼き物をいくつか見せてくれたでしょう？　あのお茶碗は、表面が少し荒い作りになっていましたよね。その感触のことを、日本語では「ざらざら」と表現することがあるんですよ。あなたの名前の響きと似ていますね。

私がそう言ったときの、ザラのいたずらつこのような笑顔を、今でもよく覚えている。「にこにこ」では追いつくことのできないあの表情を、日本語でどのように表現したら良いのだろう。